第２章 景観形成の基本目標と原理 －都市景観構造の計画－

２－１．宝塚市の景観の特性と宝塚らしさ

１．宝塚の概要

宝塚市は兵庫県の南東部に位置し、市域は東12．８km、南北21．１kmと、南北に細長く、面積が 101.89 ｋ㎡で市街化区域面積は 26.28 ｋ㎡である。昭和 29 年に市制を施行し、翌年長尾村・西谷村を編入して現在の市域となっている。人口は２１４,８６８人、世帯数が８１,９８０世帯であり、微増傾向にあり、（住民基本台帳2001年３月現在）人口密度は、市域面積当たりでは、２,１０９人／㎢、市街化区域面積当たりでは、８,１７６人／㎢である。(都市計画年報 2001 年３月)

宝塚市は、六甲・長尾連山や武庫川の豊かな自然環境を有し、明治末期の鉄道開通とともに歴史的なまち場にくわえて、阪神間のモダニズムを体現した閑静な住宅都市として発展してきた。世界的にも有名な宝塚歌劇を始め、宝塚温泉・武田尾温泉などの観光施設や、清荒神・中山寺などの豊富な史跡・名勝を有し、西谷地域のレクリエーションおよび山間田園農業地域も備え、観光都市としても有名である。近年は、ソリオホールなどの文化施設も整備されつつあり、芸術・文化のまちとしての位置づけも高い都市となっている。

２．宝塚らしさ

“宝塚らしさ”は、歴史的な沿革と21世紀への未来性から見ると、「都市らしさと田園らしさ」の両方を保持していることにつきる。具体的には以下に示す、①地形に関わるもの、②水系に関わるもの、③歴史的なものの3つの相互関係によって成り立っている。

●徒歩圏にある六甲山系と長尾山・中山山系に抱かれた都市景観

宝塚らしさの第一は、市域に標高差があるために眺望や通過時に見ることができる景観であり、武庫川を挟んでいる二つの山系、六甲山（931ｍ）・穐葉山（514ｍ）・岩倉山（486ｍ）等の六甲山系と大峰山（552ｍ）長尾山（302ｍ）・中山（478ｍ）等の長尾・中山山系に抱かれた都市景観をもっていることである。山々の風景は多様であるが、これらの山系は近畿・大都市圏のグリーンベルトの一環をなし、市民の都市生活と一体化した自然レクリエーション活動の場であるとともに、近畿圏の人々にとっても身近な野外レクリエーション活動の場となっている。

六甲山系は、大阪ベイエリアの平坦部市街地に接する山系として標高が最も高く、生態系にも独自性を有している。長尾・中山山系は、古代から聖域を持つ場として広く知られている。

これらの山系による山並みは、水源涵養地となり下流域の植木産業、畑、水田等の水源となっており、これらの地区における利用を終えると武庫川・猪名川等を経由して、下流域に流れている。これらの水は、もともと清流であり、景観整備において十分活用できるものである。

これらの山系に入る途中の山腹からは、市域全体を身近に見渡すことができ、大阪都心、

阪神間南部市域をはじめとして、遠く大阪湾や大阪南部・和歌山の山脈を展望することができる。また市街地のどこからもこれらの山系を背景とする景観が楽しめ、山々と谷間は人々に四季の生活リズムを知らせ、人々は都市空間のなかで全体を知りながら何処にいるかという位置認識を容易に持つことができる。

南部市街地は、これらの山系を背景として、中央に大きなオープンスペースとなる武庫川及び関連水系を持っており、この上に、山麓傾斜地の住宅地、扇状地の住宅地等と田、植木苗圃等の生産緑地で構成されている。

北部の西谷地域は、二つの山系の北部に連なり、伝統的農村集落・農業環境及び文化を保持しており、合わせて市民のための野外レクリエーション空間の一部を担っている。

●レクリエーション活動と開放感を体験させる武庫川の都市景観

第二は、六甲山系と長尾山・中山山系を水源地として、支流を束ねて市域南部市街地の中央を南に流下する武庫川水系がつくる都市景観である。武庫川本流で体感される大きな風景から市街地内部で「うるおいとやすらぎ」を与える小さな風景まで、変化に富む景観があらわれている。

武庫川本流は、市域上流部において「渓谷の景観」、市域の下流部において市街地に「開放感とゆとり・季節感の景観」を市民に与えている。その清流は、日々に、季節に、水面の変化および輝く光による明るさと陰影の両面をつくりだし、あわせて、山並みが見える奥行きのある風景をつくりだしている。

武庫川沿いには、市庁舎、体育館、武庫川河川敷緑地、宝塚大劇場、温泉利用施設、ホテル等の主要建築物が立地しており、河川敷は、市民の交流オープンスペースになっている。これらの拠点施設等は、シビックゾーンやシンボルゾーンとして位置付けられ、宝塚市の拠点ゾーン・都心としての都市景観を形成している。

武庫川支流は、沢のせせらぎからはじまり山麓部住宅地の谷をぬって立体的に水面と斜面緑地を見せながら緩い傾斜の平坦部を経て武庫川にそそぎ込んでいる。くわえて、市内の各所において小河川空間は、道路沿道景観の適度な分節や眺望点となり、息抜きの間合い感を与えている。

水流は、歴史をたどれば、山麓部と傾斜面市街地の境目部および溜池から、市街地内部を小さな水路等が地盤高さを利用して網の眼のように敷かれてきた。この流れは清流となって土地に水の恩恵を与えることができる。水・流れの活用は、宝塚市における都市景観の特性となる。

●“まち場”等の景観単位による都市景観

本市は前記二つの基盤の上に、地形的な自然の特性と市域の歴史的な変遷の過程を示す一つ一つの景観のまとまりによって市域が構成され、特徴ある“まち場”の景観となっている。

市域は、①山麓においては、清荒神と中山寺に見られる門前町、街道筋の集落、阪神間モダニズムの時期に開発された住宅地区、その後の近現代期の住宅地区、②武庫川と猪名川に挟まれた扇状台地上には、寺内町の小浜宿、植木産業が営まれている集落圏、③南部地域（生産緑地が集まる地区）と北部地域（市街化調整区域）における農業集落を中心とする

地区、④武庫川渓谷、その堆積地における宝塚歌劇や温泉街などの観光レクリエーション地区、⑤近年の住宅地区等が織りなし、宝塚市の都市景観を構成している。

それぞれの景観のまとまりは、山系と河川と多様な違いがあっても関係付いており、小さな場には土地に傾斜面や段差面があり、「坂のある街並み」であることが大きな特性となっている。それぞれの部分の景観は、道路から見る街並み景観と異なり、豊かであり変化に富んでいる。

住宅地を例にとれば、道路からの近景においては、見通しや見下ろしの遠景として道路・建物以外の草木・擁壁・斜面緑地・山系等が背景として入る景観となったり、あるいは上り方向では建物や樹木・斜面緑地などの立面の重なりによる奥行きのある景観などが日常的な歩行者の目で認識できる。

●歴史の開拓が読み取れる道の景観（シークエンスの景観）

市域におけるそれぞれの場の景観は、みちの景観を通じて連続して体験できる。具体的には、次の３つの系を考えることができる。①巡礼街道・有馬街道・尼崎街道・西宮街道などの歴史街道、②ａ．中間部の山・沢筋の自然道、ｂ．南部市街地にあって農耕地を通り集落を結んだ道、ｃ．北部地域の農道、③近・現代期に整備が進められた幹線道路の系からなる仕組みに特徴がある。

鉄軌道、幹線道路を通るバスルートからは、車窓からの連続した景観を見ることができる。ＪＲ宝塚線、阪急宝塚線、同今津線は、丘陵の麓を通って“まち場”を結んでいる。そのために、車窓から山腹側と平地側の通過景観を楽しむことができ、駅の周りはそれぞれに街並みに特徴を有し、特色ある入り口景観を形成している。くわえて、幹線道路を走るバスルートからは、変化に富んだ街々の様子を順次に見ることができる。

●拠点・施設によるシンボル景観（ランドマークと交流の景観）

街なかでは、歴史的な社寺・仏閣を始め、宝塚大劇場や小林聖心女子学院等の学校・教育施設、ベガホール、市役所、市総合福祉センター等の公的施設、鉄道駅周辺の再開発による商業集積地区等、都市活動や市民生活に深い関わりのある拠点施設が多くあり、都市のランドマークとなるとともに、地域の特性を形成するシンボル的要素ともなっている。

これらの拠点・施設は歴史的な背景を踏まえ、今後も市民生活に深い関係を持ちつづけることとなるとともに、新たな交流の拠点等として積極的に活用し続ける必要がある。このため、これらの施設等を生かし、地域の特性をより一層高めるように景観形成に努める必要がある。

くわえて、これらの施設は、道路景観の形成、河川空間の形成、水と緑のネットワーク形成等関連する他の要素にも十分配慮し、これらの景観形成のアンカー（景観の基調となる主要な施設）となることが望まれる。

2－2．市域の基本構成

市域の空間構成は、図 2－1に示すように、西部から中央部を構成する六甲山から長尾山・中山にいたる山系により、①南部地域、②山系が連なる中間地域、③農業が営まれ「西谷地区」と呼ばれる北部地域の大きく3つに分けることができる。

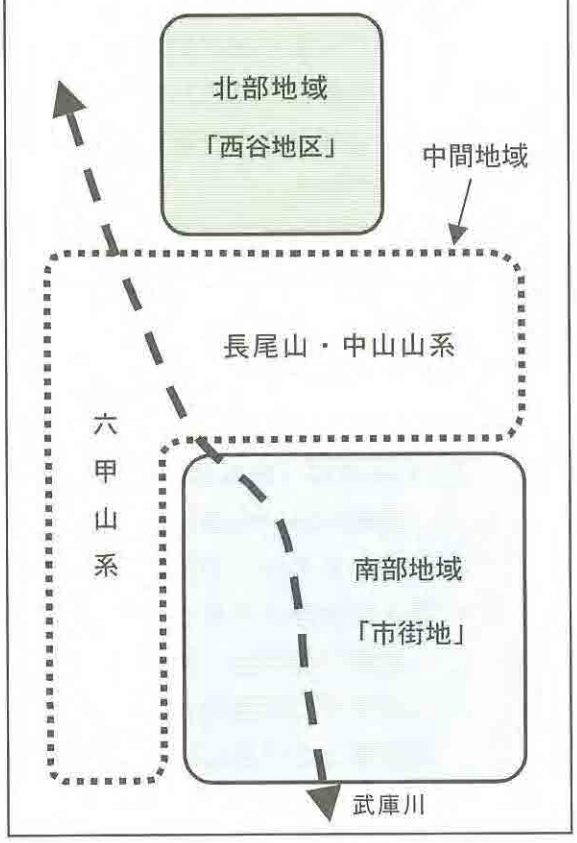
南部地域は、本市の中心部として大部分が市街地となっている。区域の北西部から南にかけて、武庫川が流れ、市街地を東西に2分しており、くわえて、中間地域の沢筋を流れる小河川・水路が平坦部の市街地を経由して武庫川に流れ、水の豊かな市街地を形成している。

山麓部と平坦部の境部分に、いくつかの歴史的街道が通り、主要な部分に歴史的集落が保全されている。さらに市街地を囲む北・西の山麓部には鉄道や幹線道路が通り、都市構造の骨格をつくっている。

住宅地については、南・東斜面の山腹部、山麓部から平坦部にかけ開発整備されてきた。

また市街地の東部・南部では本市の特徴でもある歴史を誇る植木・花き栽培地も見られる。

図 2－1　宝塚市域の空間構成



1．南部地域（市街地）

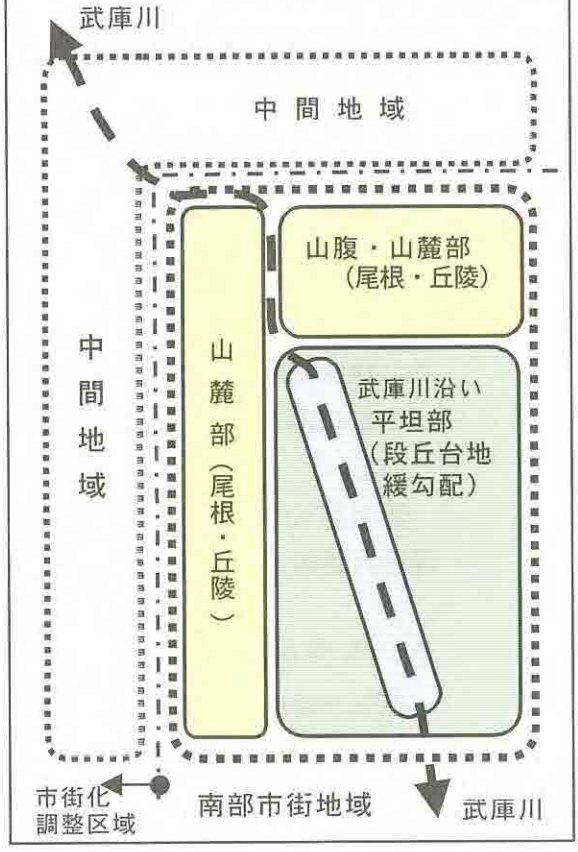
南部地域は、市街地の背景となる山地部に連なる山麓部と武庫川沿いの平坦部より構成される。

（1）山腹・山麓部

本市を代表する斜面地を利用した閑静な住宅地が広がる領域で、樹林に覆われた櫛状の小さな尾根が段丘台地の平坦部に張り出し、その尾根の間を小さな河川が刻む特徴的な景観を形成している。斜面に沿った住宅地の状況が山地部から俯瞰されるとともに、対面する同じ山腹・山麓部からも見渡すことができ、さらに市街地平坦部の各所からも眺望（仰瞰）される地域である。

ここでは特徴的な地形により、住宅地のまとまり感が創出されていると同時に、斜面地の緑

図 2－2　南部市街地域の空間



の帯として住宅地の連坦を適度に分節し、緑豊かな住宅地を印象付けており、背景の緑地環境との連続性を持つ重要な地域であるといえる。

細かく張り出す尾根筋等の先端部及び要所には多くの社寺が周囲を取り囲む社寺林とともに位置し、これらを結ぶものとして、巡礼街道、西宮街道等の歴史的な街道が通り、背後の山並みや小丘状地形と一体となって史跡や文化拠点として緑豊かな歴史的空間が形成されている。

これら山麓部の多くの住宅地は、昭和初期の洋風住宅や昭和初期等に開発された閑静な住宅地等であり、開発時期やその時代を反映し、モダニズムを感じさせるなど文化的住宅都市としての宝塚市のイメージ形成に大きな役割を果たしている。また東部地域では、住宅地と植木産業の樹林畑や河川沿いの緑地がつながり、緑豊かな環境が保持されている。

（２）平坦部（段丘台地）

武庫川沿いをはじめとした平坦部では、武庫川右岸は武庫川に向かった東さがりの傾斜を持っており、小仁川や逆瀬川に代表される小河川とこれに直行する御所水路のような水路・溜池等による水のネットワークを形成している。

武庫川左岸は、伊丹台地を形成するものの武庫川と猪名川の両河川に向かった東下がりと西下がりの傾斜をもった地形となっている。小河川に沿って随所に溜池があり、条里地割が残っているなど、早くから開けた地域である。

一方、歴史街道沿いに形成された集落地、駅周辺の住宅地、道路沿道の住宅地、商業・工業等との併存地区等では開発された時期毎に多様な表情をもっている。一部にはミニ開発的な住宅地や農地転用による小規模開発住宅地など景観形成上さらなる調整が求められる住宅地も存在している。

宝塚駅から南口駅付近はシンボルゾーンとして、また市役所周辺から福祉センターにいたる地区はシビックゾーンとして宝塚の顔となる地区でもある。

平坦部中央を流れる武庫川は河川整備とともに、親水空間、市民の散策・回遊ルートの整備等が求められている。一方、小河川は平坦部にほぼ均等に入っており、溜池とともに、周辺地の景観環境形成に重要な役割を持ち、山並みへの眺望点、上流部や市街地各所を結ぶ空間として、豊かな水辺の景観と水と緑のネットワーク形成が求められる。

くわえて、武庫川左岸での、山麓部から続く植木の樹林畑と点在する生産緑地は、開放的な緑地空間となっており、社寺林や教育施設周辺の緑地、河岸の部分的緑地などと連なって緑の固まりが見られるものの、平坦部全体としては緑が豊富とは言い難い状態になっている。

また多くの道路は、市街地を囲む山並みを見通す方向に通り、山並みへの眺望や山腹の施設（建物）も強く認識される軸線となっている。

２．中間地域(山間地域)

南部市街地域と西谷地域の中間に位置し、双方から山稜線が見えている六甲山系と検見山（475m），大峰山（552m）、長尾山（302m），中山（478m）等の長尾・中山山系の区域であり、大部分が樹林地となっている豊かな自然環境を有している。これらの山並みは市街地のどこからでも眺望され、市街地の背景となる緑地とスカイラインを形成し、

宝塚をイメージづけ、本市の景観構造の重要な特性となっている。

これらの山間部には、湯本－塩尾寺－岩倉山－六甲山につながる山陽自然道、清荒神－中山奥院参道－北中山公園－西谷に至る近畿自然道等の尾根筋や沢筋のハイキング道(自然歩道)などがあり、ゴルフ場とともに、市民のレクリエーションの場となっている。もともとこの尾根、沢筋等には、古墳・霊場型の社寺などが点在し、小河川の源流地域となっていることから清流の流れる精神的な拠点となっていた。

これらの地域は市街化調整区域であるとともに、国立公園、近郊緑地保全区域、公園等として担保されている地域である。さらに、山麓部から市街地平坦部を流れる河川の水源地としても重要な空間となっている。

このことより、現在、市街化調整区域としている主旨を尊重し、市街地の背景となる一方、西谷地域の山間田園環境の緩衝地域として、山並みを保全するとともに開発の抑制・緑地保全を積極的に進めるべき地域である。

3．北部地域（西谷地域）

西谷地域は、古宝山（459m），竜王山（366m），今井岳（386m）大岩ヶ岳（384m），馳渡山（289m）等の豊かな樹林に覆われた山並みに囲まれた農業を基本とする集落が立地している農山村地域であり、市街化調整区域である。

谷筋の主要な部分では佐曽利川、大原野川、波豆川、境野川及び惣川等の河川が県道塩瀬宝塚線、県道川西三田線、県道笹尾塩瀬線、県道切畑多田院線等の道路と平行し、地域をほぼ十字に通っている。このような川に沿った谷筋空間に、佐曽利、長谷、大原野、境野、玉瀬、切畑等の集落が形成されており、十字の交差点となる大原野に公共施設等が集まり、地区の中心地を形成している。この集落では、伝統的居住空間を継承し、集落の一部には「かや葺屋根」等の伝統的な主屋根を持つ居住施設も残され、周囲の山並みや田畑と一体となった美しい田園・山里景観が残されている。

一方、北部地域の南側尾根を越えた山間部（古宝山と大峰山の間の谷筋一県道切畑猪名川線沿い）を東西に横切る第2名神自動車道の建設が予定されており、山間景観に人工的構築物が形成されることになる。

2－3．景観基本計画の目標

1．基本コンセプト

第4次宝塚市総合計画では、都市づくりの将来像をつぎのとおり定められている。

水と緑とふれあいのまち宝塚

－人と自然がふれあう、心豊かな美しいまち宝塚－

これに基づき、都市像の実現のために、都市景観基本計画のコンセプトをつぎのとおり定める。

■ 宝塚市都市景観基本計画のコンセプト

街並み、水、緑の独自性が織りなす「庭園都市景観」

2．景観形成の基本目標と具体的方向

基　本　目　標

1．宝塚市の景観構造を継承・育成するために、豊かな水と緑を保全・育成し、水と緑のネットワーク形成による景観軸を創造する。

2．市民・人々の交流を支える拠点施設、道路等のネットワーク整備において、ランドマークの形成や個性的で魅力ある街並みの保全・育成を実現する。

3．宝塚市の歴史や文化の蓄積を生かし、品格と深みを持った都市景観を形成する。

4．生活の基盤となる“まち場（住宅地等）”の歴史・特質を保全・育成するとともに、その特質を生かした良質な住宅地景観を形成する。

5．北部地域（西谷地域）は、山並みに囲まれた農山村景観や自然環境を保全・育成する。

・具体的方針

1．宝塚市の景観構造を継承・育成するために、豊かな水と緑を保全・育成し、水と緑のネットワーク形成による景観軸を創造する。

① 背景の山並み(稜線・斜面)を保全するとともに、眺望に配慮し、山並みと調和した街並みを形成する。
② 河川敷や沿道等において、緑を守り、育て、親水空間を創出し、歩行者を優先した豊かな水と緑の環環のネットワークを形成する。
③ 河川敷、河川沿いでは、緑豊かな憩いの空間を創出し、眺望と潤いのある街並みの形成する。
④ 武庫川の河川敷および沿川街区は市民のオープンスペースとして位置づけ、公共性に配慮し、河川への接近性、山並みへの眺望を確保するとともに河川沿いに遊歩道を整える。
⑤ 生産緑地を保全・育成し、ため池・学校・公共施設などと隣接するエリアを一体的な環境拠点として、水辺と緑と施設が融和する環境を育む。
⑥ 道や川の結節点や公共施設周辺などを中心に人々に親しまれるオープンスペースを創出し、緑豊かな景観ポイント、眺望点をつくる。

2．市民・人々の交流を支える拠点施設、道路等のネットワーク整備において、ランドマークの形成や個性的で魅力ある街並みの保全・育成を実現する。

① 主要な道路は潤いのある歩行者空間をつくり、楽しく、味わいがある沿道景観づくりを進める。
② 主要な道路は、巡礼街道等の歴史街道とネットワークを形成するとともにまち場の特性を表象するよう沿道の景観形成を進める。
③ まちのシンボル、ランドマークとなる拠点や建築物等は全市的な位置づけとまち場の特性に配慮し、その特性を継承・育成し、景観形成に努める。
④ 個性豊かな施設と緑豊かな環境を活かし、魅力あふれる観光・レクリエーション空間を育成する。
⑤ 建物・構造物等の施設デザインは、背景となる山並みや水と緑に囲まれた街並みと調和させ、個性を育てる。あわせて、広告物の掲示、配置等に配慮する。
⑥ 環境問題に配慮し過度な照明の規制などを行いながら、道路照明の演出やランドマーク等のライトアップを進め、市街地の夜景の魅力を高める。
⑦ 地区の特性を踏まえた色彩計画を検討し誘導する。

3．宝塚市の歴史や文化の蓄積を生かし、品格と深みを持った都市景観を形成する。

① 歴史を語る集落や建物を尊重した街並みを形成する。
② 社寺や史跡の環境を保全し、風情ある地域環境づくりをする。
③ 優れたデザインの建物や文化施設を、眺望景観や街のネットワーク形成に生かす。

4．生活の基盤となる“まち場(住宅地等)”の歴史・特質を保全・育成するとともに、その特質を生かした良質な住宅地景観を形成する。

① “まち場”の地形特性、歴史的背景および周辺まち場との関係に配慮し良質な住宅地景観を保全、育成する。
② 山並みと調和する住宅地景観、閑静な趣きを醸し出す良質な住宅地を保全、育成する。
③ 山並み・斜面地等の緑や河川、農地等と調和する、潤いのある居住環境を継承、創出する。
④ “まち場”環境に調和した生活道路の整備、歴史街道等との連絡、歩行者ルートを整える。
⑤ “まち場”の特性を踏まえた個性ある住宅地景観、街並みづくりを住民等とともに考え、取組んでいく。

5．北部地域（西谷地域）は、山並みに囲まれた農山村景観や自然環境を保全・育成する。

① 山並みに囲まれた農村環境、地域の歴史に培われた集落景観を継承する。
② 山林、緑地、水系等は、自然環境の保全に努め、適切な開発抑制および交通量を誘導する。
③ 観光・レクリエーション・市民サービス施設等の導入は、地域の活性化と環境との調和を大切にする。

2－4．都市景観の基本構造における原理と計画

1．宝塚市における都市景観の原理と景観の構造

宝塚市の景観は4つ側面からなる景観基盤を持つ構造である。

（1）地形・河川・植生の「景観基盤」；basis of urbanscape(landscape)

（2）ネットワーク（道路・鉄軌道）の「景観網」；network of urbanscape

（3）まち場の構成による「景観の性格」；character of urbanscape

（4）都市拠点（都心・地区等の中心、公共空間）の「景観焦点」；focus of urbanscape

（1） 地形・河川・植生の「景観基盤」；basis of urbanscape(landscape)

宝塚市の景観は、傾斜地、丘陵地、段丘、山麓、山間地と、その間を縫う河川系、水系、集水域によって、景観の輪郭、景色、山並みの稜線や景観のまとまりが形成されている。また、この中に、この表層（地下層、地表、大気層）に植生をはじめとする生物の生態系が被っている。景観デザインでは、地形（標高と形状、斜面地と勾配、段丘地など）とともに、植生と水の流れが基本的な方向づけとなり、これらの自然または風景の中に人間社会の営みがなされ、都市景観が形成されている。

特に、本市の東斜面である六甲山系の連山、南斜面となっている大峰山・長尾山・中山連山、西谷地域の山々がある。これらの沢筋や市域のほぼ中央に武庫川本流と清流を流下させる支流の水系と西明寺川などの猪名川支流がある。さらに、平坦部では市街地内の生産緑地、西谷地域の農用地、湿原などがある。

これらを絶えず点検し都市景観の面を組み入れた保全整備を計画的に進める必要がある。

（2）ネットワーク（道路・鉄軌道）の「景観網」；network of urbanscape

人々は生活行動の中で都市全体の景観構造を把握し、それを基にしてつぎの生活活動を構想し行動する。

人々が移動する幹線の道路景観あるいは鉄軌道からの景観は都市景観の基本である。これらの景観網は、山並の稜線、山腹はもとより、折々の水流の変容、“まち場”や町筋の変遷、都市広場や商業核の性格を知ることができ、街のしくみや特性を考える媒体となる。

さらに、道路や交通機関の景観は変化し、連続する景観であり、流れとしての景観である。また市民が共通に持つことができる景観である。景観網の路線を設定し整備を進める必要がある。

（3）“まち場”の構成による「景観の性格」；character of urbanscape

都市イメージの形成は、景観基盤や都市拠点の存在は欠かせないが、都市の成熟にともない、生活が営まれる“まち場”の構成状態に大きく影響される。宝塚市域では古代以前から人々の営みが積み重ねられ、まち場の形成と変遷が続いている。また、ひろく文化財資源が蓄積され、それらは現代生活と深く関わっている。

20世紀、世界的に大都市、巨大都市が成立したが、本市は大阪神戸の大都市の近傍のにあり、大都市の市街地が拡大し連担することから市域の独自性、個性が弱められ都市生

活の豊かさや魅力が消失しかねない。都市の独自性は都市景観の実体を考察してこそ実現できるものであり、都市のそれぞれの場の実体に即した総合性を確保することが望まれる。

宝塚市域は、都市景観の独自性を有しており、地域における歴史的沿革、経済活動、居住地の成立と変遷を良く反映している。都市景観の基本である景観単位（景観のまとまり）の実体を整理し、これを“まち場”とする。“まち場”は市民生活の最も身近な都市空間であり、市民全体のレクリエーションとコミュニケーションのための場である。このことは国際観光都市、リゾート都市の性格を有する本市にとって“まち場”は都市活動の資源である。

（4）都市拠点（都心・地区等の中心、公共空間）の「景観焦点」；focus of urbanscape

都市は、公共空間、すなわち都市のセンターならびに社会施設（市民施設）を建設し、時代の変遷を通じて改造され、文化的な蓄積がなされる。これらの公共空間及び市民施設は、歴史的必然性や外的変化によって評価され、定着していくことになる。

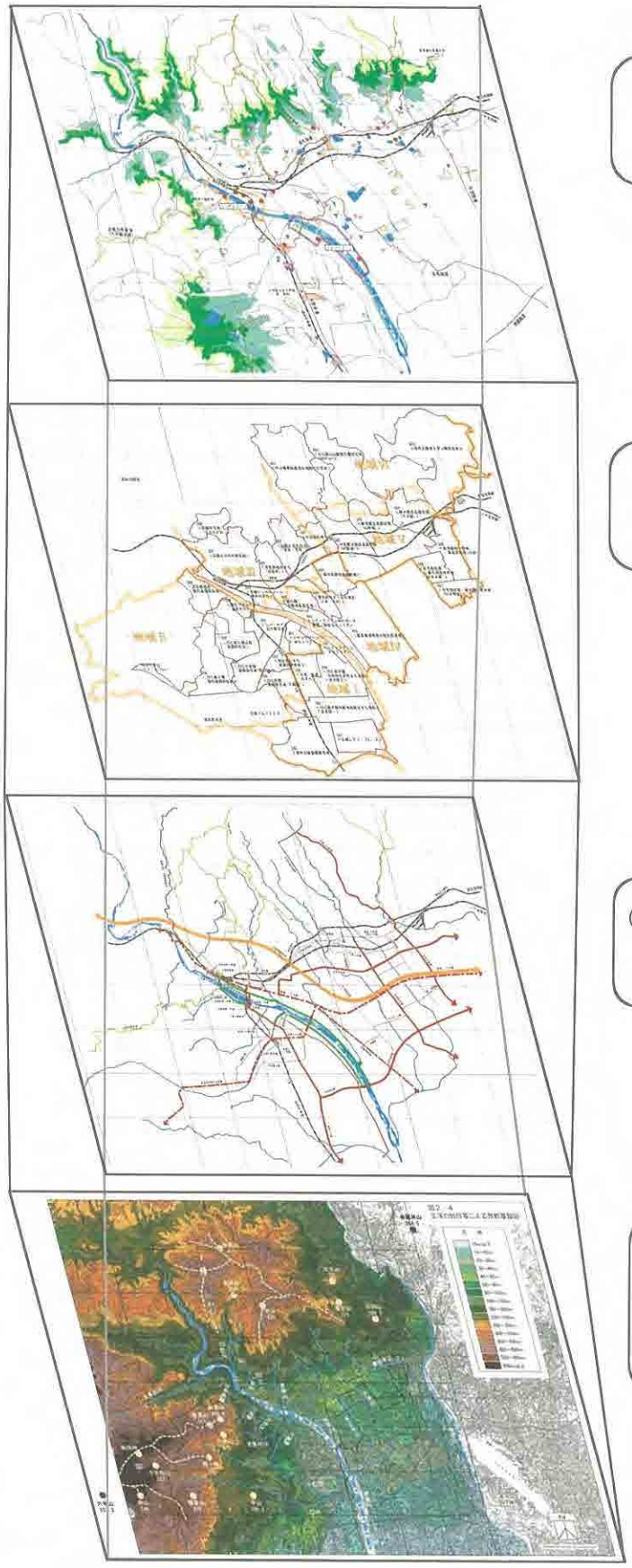
宝塚市の景観としての拠点は、まず第１には、第４次宝塚市総合計画や都市計画の基本方針で設定されている都市シンボルゾーン、シビックゾーンがある。第２には阪急宝塚線、今津線１０駅、ＪＲ宝塚線３駅の各駅を中心として商業・業務核を持つ街区群である。これらは、都市シンボルゾーンの駅のほかに、バスターミナルのある大きな地区中心地と、歩行者を対象とした駅勢圏を中心とした小さな地域中心地に分けられる。第3にはシビックゾーンのほかに、全市域または地区中心の市民施設である。第４には歴史的に蓄積され、市内外からの来往がある「場」である。いわゆる清荒神、中山寺等の「場」があげられる。第５に、都市景観にオープンネス（開放性と自然性）を提供するオープンスペースである。武庫川内の河川敷緑地、少年自然の家、自然休養林等のオープンスペースや大規模な公園緑地である。

それぞれについて、次世代に向けて点検と検討を行い、継承すべきは保全整備し、（１）、（２）、（３）の景観基盤と関係づけて、系統的、計画的に景観整備を行う必要がある。

なお、都市景観は、以上の景観構造に「各まち場に立地する具体的な景観要素」がつながって成り立つ。これらは、第４次宝塚市総合計画および都市計画の基本方針においてまとめられた「地域を示すブロック」を構成する“まち場”の内容とする。

ちなみに、“まち場”において大きな景観基盤の４つにつながるものには以下の内容がある。（１）地形・河川・植生の「景観基盤」に関連するのは、溜池や細網水系、あるいは小規模植生などがある。（２）ネットワーク（道路・鉄軌道）の「景観網」に関連するのは、居住地区内の主要な歩行者幹線路、地区内の幹線街路がある。（３）“まち場”の構成「景観の性格」に関連するのは、“まち場”を代表する街区や町筋の街並み景観、まち場のランドマークに設定できる建築物等や橋梁などの構築物などがある。（４）「都市拠点」に関連する地域ブロックや“まち場”の拠点は、小中学校区の焦点である学校敷地、あるいは幼稚園・保育所、さらには街区公園などがある。

図２－３　宝塚市景観構造の原理



④ 拠点施設等の景観基盤

図２－１４
表２－８

③ “まち場”の特性の景観基盤

図２－１２
図２－１３
表２－３
～表２－７

② 幹線道路・交通網等の景観基盤

図２－８
表２－２

① 地形・河川・植生等の景観基盤

図２－４
図２－５
図２－６
表２－１

基本となる四つの景観基盤による景観構造（重層化・複合化）

2．景観基本構造の計画

本市の景観の基本構造は、大きくは次の４つの系が一体的・重層的に組み合さっている。

景観構造は、系に関わる対象物を大きく変更したり追加することにより変化するが、長年に渡って変遷していくとき、市域の景観構造は変化する。

本市の景観構造は、ようやくその骨格を明確にしつつあり、本基本計画では、現在形成されつつある景観構造を継承・育成していく。

４つの景観基本構造とは、（１）地形、河川、植生等の景観資源の基盤による景観、（２）幹線交通道路等の都市活動の骨格フレームによる景観、（３）それぞれの住宅地等の地区としてのまとまりのある“まち場”の地区特性を表す景観、（４）市民生活や交流の拠点等の空間とランドマークによる景観、でありこれらの重層構造によって構成される。

この景観基本構造を充実・強化する必要がある。

（１）地形、河川、植生等の景観基盤の計画

１）山並み（図２－４　宝塚市の地形等による景観基盤図）

本市の土地・形質の特徴は、武庫川を挟んでいる二つの山系、六甲山、岩倉山の属する六甲山系と大峰山・長尾山・中山等の長尾・中山山系による都市景観を有し、この山系の地域は、市域の中間地域となっている。これらの山系に入る途中の山腹からは、市域全体の様相から大阪平野遠く大阪湾や大阪南部・和歌山の山脈を展望することができる。市街地のどこからでもこれらの山系を背景とする都市景観が楽しめ、都市空間のなかで何処にいるかという位置感覚を容易に持つことができる。

南部市街地は、これらの山系を背景として、山麓傾斜地の居住地、扇状地の居住地と生産緑地等で構成されている。北部地域は、二つの山系の北部に連なり、伝統的農村集落・農業環境とともに山野のレクリエーション空間が保持されている。

このような土地の形質は、宝塚独自のものであり、都市の景観や構造に立体的な表情をもたらしている。具体的には、１）遠景では大阪平野を一望できたり、六甲山系山裾部から長尾山・中山山系の山裾部住宅地が相互に近くの家並みの先に見ることができる。２）中景では山地部から近くの山裾部の住宅地を俯瞰し、また幹線道路から沿道の建物越しや道路の焦点に山並みが立体的に見ることができる。３）近景では傾斜地の住宅地として道路等が勾配に応じて蛇行し、住宅宅地の法面が石垣や植栽面として立面的に見えたり、樹木・建物・工作物等が立体的に重なって見える。

このように、土地の形質が都市景観に反映されることになり、斜面地が多く出現し、建物が上下に重なって見えてくる等の土地の立体的な構造を踏まえた景観形成を行い、その特性を生かした緑の山並み、緑のネットワークを形成する。

２）水と緑のネットワーク（図２－５　宝塚市の河川・溜池等による景観基盤図）

ほぼ中央を流れる武庫川は、市街地を大きく東西に2分する水の中心軸となり、水の季節感を持った大きなオープンスペースとなっている。武庫川は多くの小河川を受け入れ、市街地の大部分をその流域に含む。市域の東辺端の最明寺川流域は猪名川流域に属してい

る。これらの河川は市街地にほぼ均等に入り、地域の生活において、水に容易に触れることができる。

特に東西方向に流れる逆瀬川・白瀬川水系、仁川・小仁川水系、支多々川水系、塩谷川水系、南北方向に流れる天王寺川水系、天神川水系等は、適度の川幅と直線的な区間を持ち、川筋から山並みや川沿い施設への眺望が開けている。さらに、これらの水系は自然生態の動線となっている。これらの小河川空間は、整備が進んでいるものの親水性は十分とはいえない状況である。

これら小河川沿い、特に武庫川左岸では平野部に多くのため池が設けられており、ため池を介し山腹からの流水が植木圃場、畑、水田等に上手に利用されている。まちづくり・景観整備には、このような水の流れを保全・利用することが有効であり、宝塚でこそ実現できるものである。このような水と緑のネットワークの形成・強化する景観整備を行う。

3）緑地・植生（図２－６ 宝塚市の植生資源による景観基盤図）

① 山地部では、ほとんどがアカマツーモチツツジ群集により占められており、一部はゴルフ場の人工草地となっている。谷筋や斜面下部では、コナラーアベマキ群集がある。

② 市街地の清荒神・清澄寺や満願寺等には気候的な自然植生としてコジイーカナメモチ群集などが分布している。

③ 環境庁によると宝塚市域では、「波豆八幡神社のツクバネガシ林」が特定基準Ａとしてあげられている。

④ 宝塚市史によると市域の潜在植生はモミーシキミ群落、コジイークロバイ群集となっているが、現状では、ほとんど見られない。

⑤ 山麓部から平坦部にかけては、社そう林や生産緑地としての植木圃場等が身近な緑の固まりとして市民生活に潤いを与え、また都市景観に独自性と変化と安らぎを与えている。

⑥ くわえて、いくつかの街路樹が上記の緑の固まりと連続して、緑のネットワーク形成に役立っている。なお、市街地内には32本の保存樹・保護樹木、７ヶ所の保存樹林・保護樹林・自然環境保全地区が指定されている。（図２－６ 植生図）

さらにまとめると、宝塚市の山間地での緑地や市街地での田・植木栽培地等の生産緑地、社そう林、斜面緑地等の面的な広がりに対し、河川沿い緑地、街路樹のある道路等がこれらを結び、水と緑のネットワークを形成している。これらは周辺の山間部・緑地等と一体となりビオトープとなり、生態系の景観が表れている。

景観整備では、植生の遷移を考慮しながら生態系の保全を十分に配慮して進める。

表２－１ 山並み・河川・緑地等の景観基盤の計画整備の方針

類型		景観構成資源	景観整備の方針
山並み		・六甲山系から長尾山・中山山系の山並み ・西谷地域をとりまく山並み	・山並み・緑の保全・修復 ・地形等の保全 ・眺望点確保
水系河川	武庫川水系	武庫川本流 ・ 上流自然・渓谷区域 ・ 中流シンボルゾーン・シビックゾーン区域 ・下流自然河川敷ゾーン	・自然渓谷景観の保全、沿道建物の河川景観との調和 ・回遊プロムナードの整備・小広場の整備 ・川沿いの建物の高さ、間口、色彩等の調整、眺望への配慮 ・自然に配慮した親水性の向上、 （堤防上の道路や平行道路の利用による回遊緑道・小広場等を整備する骨格景観整備河川）
		仁川・小仁川 御所水路・川西川 逆瀬川・白瀬川水系 支多々川水系、塩谷川水系 観音谷川、惣川、一後川 荒神川、大堀川水系 天王寺川水系、（本流、足洗川、勅使川） 天神川水系	・水質の保全・美しい水面の保持 ・水と緑のネットワーク形成・親水空間の整備 ・周辺施設（学校・公共施設・公園等）との一体的環境整備による景観拠点の形成 ・沿道の建物調整 ・橋上、幹線道路との交差部、交差点等における眺望点の確保
	最明寺川水系		
	西谷地域水系：惣川、川下川、境野川、波豆川、羽束川 千刈水源地		・水質の保全・美しい水面の保持 ・水と緑のネットワークの形成、自然の湿原等の保全
溜池		深谷貯水池、皿池・上池（社町） 広沢池・下の池（勤労青少年ホーム） 中野池・西の池、 安倉上池･上の池公園、 安倉下池・下の池公園 菰池、辻ヶ池(阪急中山駅)、 八幡池・皿池・八幡神社（JR 中山寺駅）・妙玄寺廻り 淵池（勅使川） 菱池・新池・沢池（あいあいパーク） 橋谷池（東公民館、東消防署、長尾南小学校等） 平井山荘の小規模溜池（５つ）	・水質の保全・美しい水面の保持 ・水と緑のネットワーク(緑道等)形成 ・親水空間の整備 ・周辺施設（学校・公共施設等）と一体的環境・景観整備 ・周辺の建物との調整・眺望点・展望点の確保
		西谷地域の農業溜め池、湿原（波豆川）など	・水と緑のネットワークの形成、自然の湿原等の保全
		標高差・植生などの形質	・植生・緑のネットワークの保全・育成
大規模オープンスペース（スポーツセンター、防災公園等）			・緑の保全、レクリエーション空間としての整備

宝塚市の都市景観基盤：

宝塚の景観は大きな標高位差の地形と豊かな自然が基盤となっている。美しい造形・建築物等は自然と際だった対比の立体的な都市景観を生み出す。奥行きのある景観と情報量が多い景観となる。

「南部市街地の景観」

写真番号の＜　＞は、ページ34～36のまち場番号、（　）内は整理番号を示す。以下写真については同じ。

長尾山霊園からは大阪平野が展望　＜305＞(74-32)

武庫川中流、地形が造る景観の特徴
武庫川・建物群・山並みが同時に見える景観＜401＞(63-34)

武庫川、各標高の市街地、山並みスカイラインが一望
＜104＞(53-23)

宝塚神社境内から眺望
市役所等から雲雀丘等まで
＜202＞(54-16)

光ガ丘からは宝梅・千種を越して大阪都心まで
＜206＞(59-25)

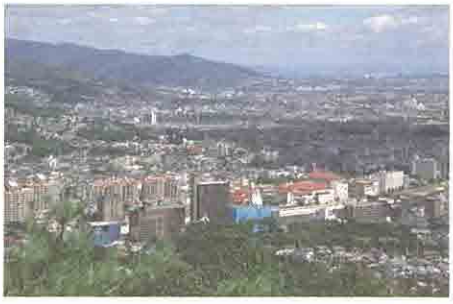
武庫川からシンボルゾーンの表情がダイナミックにみえる
＜209＞(6-32)

シンボルゾーンのアンカービルディングの宝塚大劇場
＜302＞(16-3)

武庫川中流、下流の宝塚新大橋の方向
＜401＞(67-35)

武庫川宝塚新大橋のたもと河川敷緑地から
＜401＞(66-15)

武庫川左岸から武庫川右岸を甲山がサイン＜401＞(63-24)



塩尾寺から川西方面を
＜208＞(57-29)

「南部市街地の景観」つづき

武庫川　市役所・宝塚新大橋を、
六甲山頂への岩倉山を背景に
＜401＞(61-37)

月見ガ丘・山陽自然道から宝塚市市街地の都心空間構造
が見え、遥かに見渡せる眺望を持つ　＜209＞(57-29)

千種から宝梅、光ガ丘等の斜面
住宅群　＜205＞(29-34)

月見山から武庫川対岸が明瞭に
＜208＞(57-9)

中山寺から中山奥の院への行程
南に大阪都心・上町台地が
＜501＞(34-35)

山手台から山本台を越して宝塚
市西部六甲山系山腹・甲山など
＜601＞(21-13)

中山寺から
中山奥の院への行程
＜501＞(34-13)

中山寺から中山奥の院へ、
東側に中山桜台が展望
＜501＞ (34-15)

中山寺から中山奥の院へ、西
側に宝塚市西部、六甲山系が
＜501＞(34-20)

逆瀬川上流へ景観は
自然造形によって明瞭な識別を
＜202＞(70-35)

天王寺川の下流からは、長尾
山系・中山連山の緑帯が取り
巻く　＜405＞(53-14)

「南部地域の景観」つづき

安倉中の生産緑地から
北西の山並みに向かって
＜453＞(84-15)

宝塚長尾線天神川との
交差橋上から山本・平井方向へ
＜503＞(7-29)

山本南の植木生産緑地から
中山連山中山桜台など
＜503＞(7-26)

「西谷地域の景観」

西谷地域　塩瀬宝塚線沿いから
切畑集落一帯
＜702＞(45-30)

西谷地域　武田尾温泉地
旧福知山線軌道後から名塩方面
＜701＞(24-17)

上佐曽利のあたり
塩瀬宝塚線北端
＜706＞(49-30)

西谷地域　大原野中部　西谷
支所・自然休養村センターなど
＜705＞(49-18)

少年自然の家
展望所から千刈水源地方面へ
＜707＞(47-12)

大原の西部・波豆川流域
＜707＞(46-35)

図２－４
宝塚市の地形等による景観基盤図

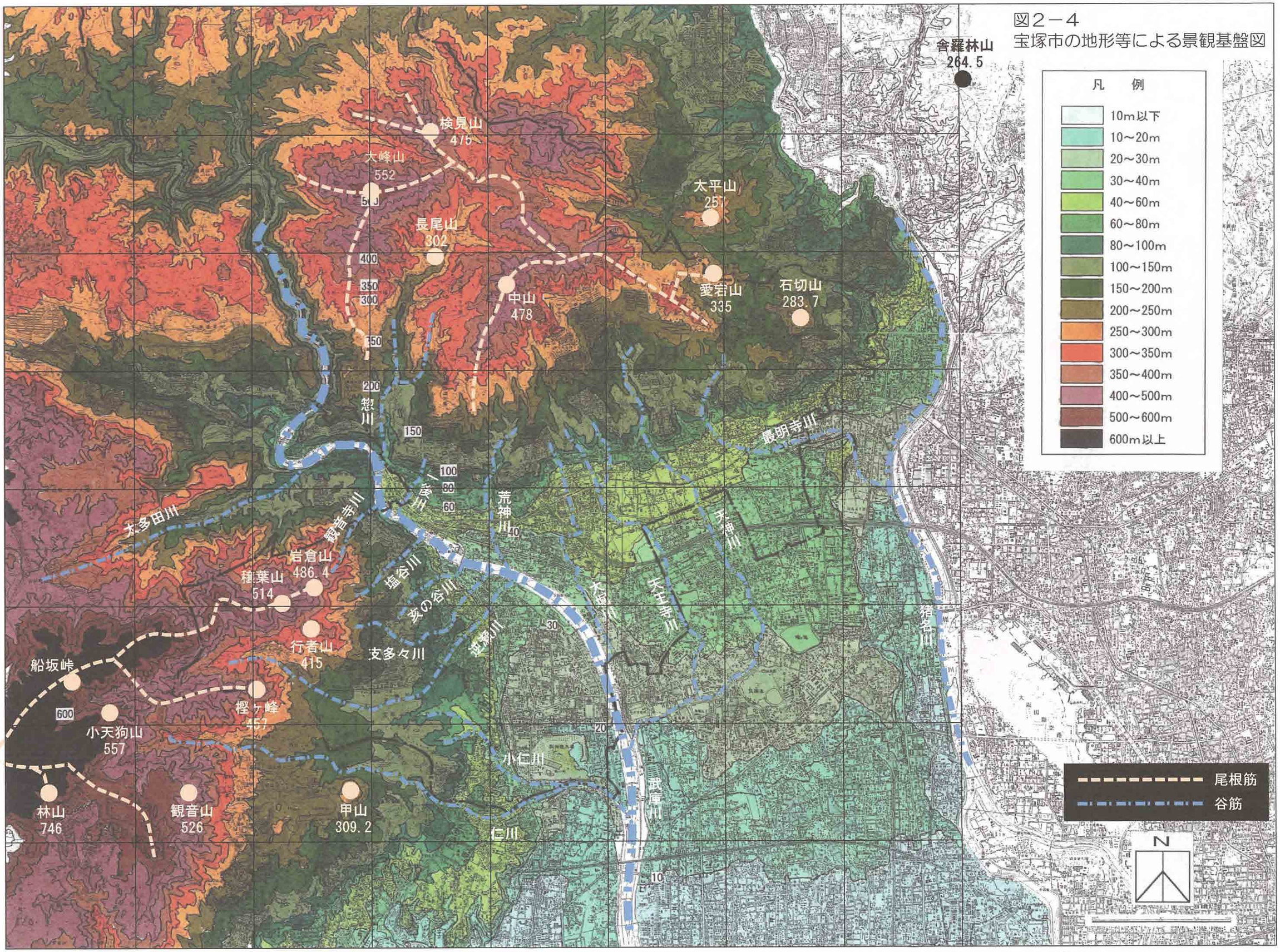


図2－5

宝塚市の河川・溜池等による景観基盤図

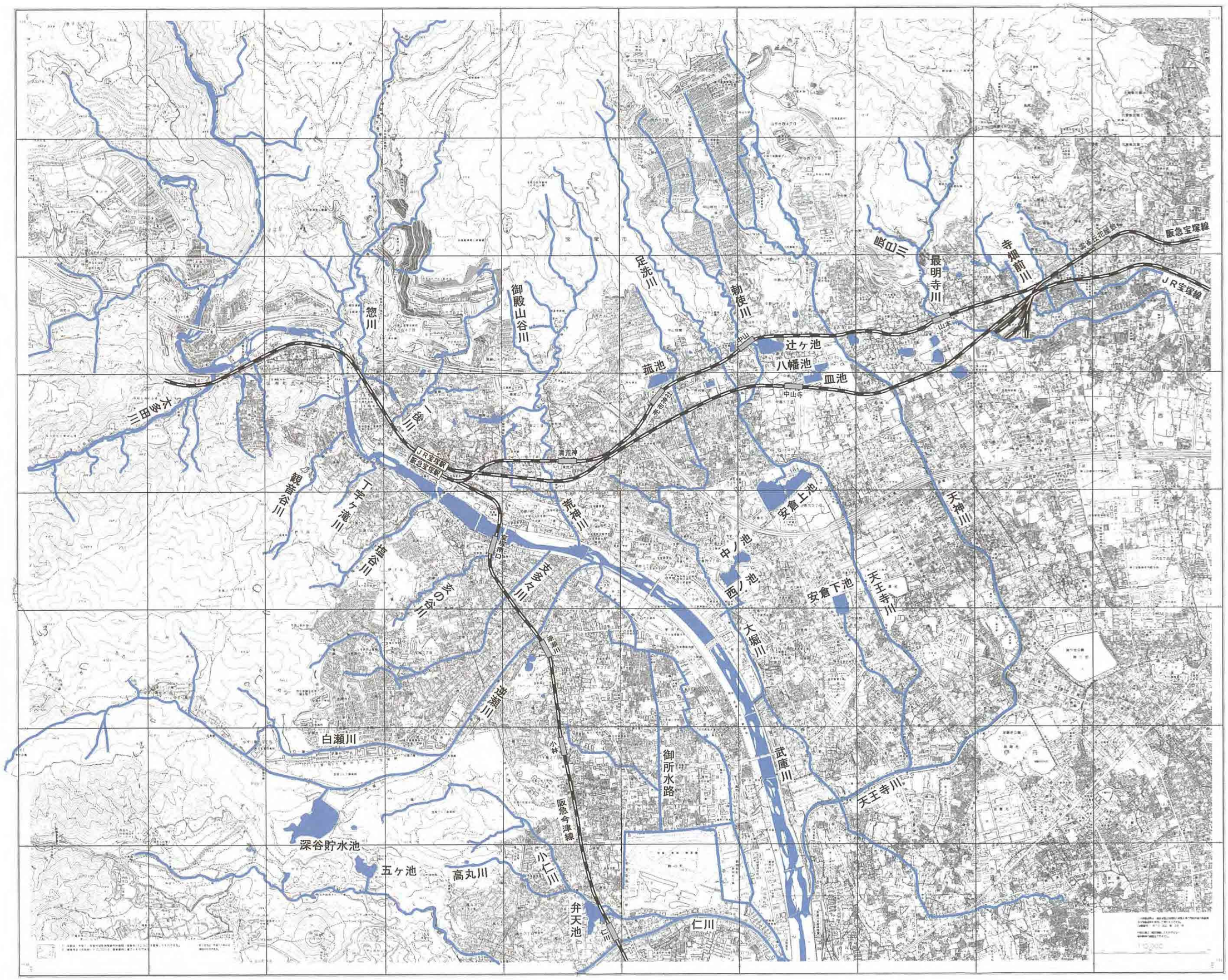
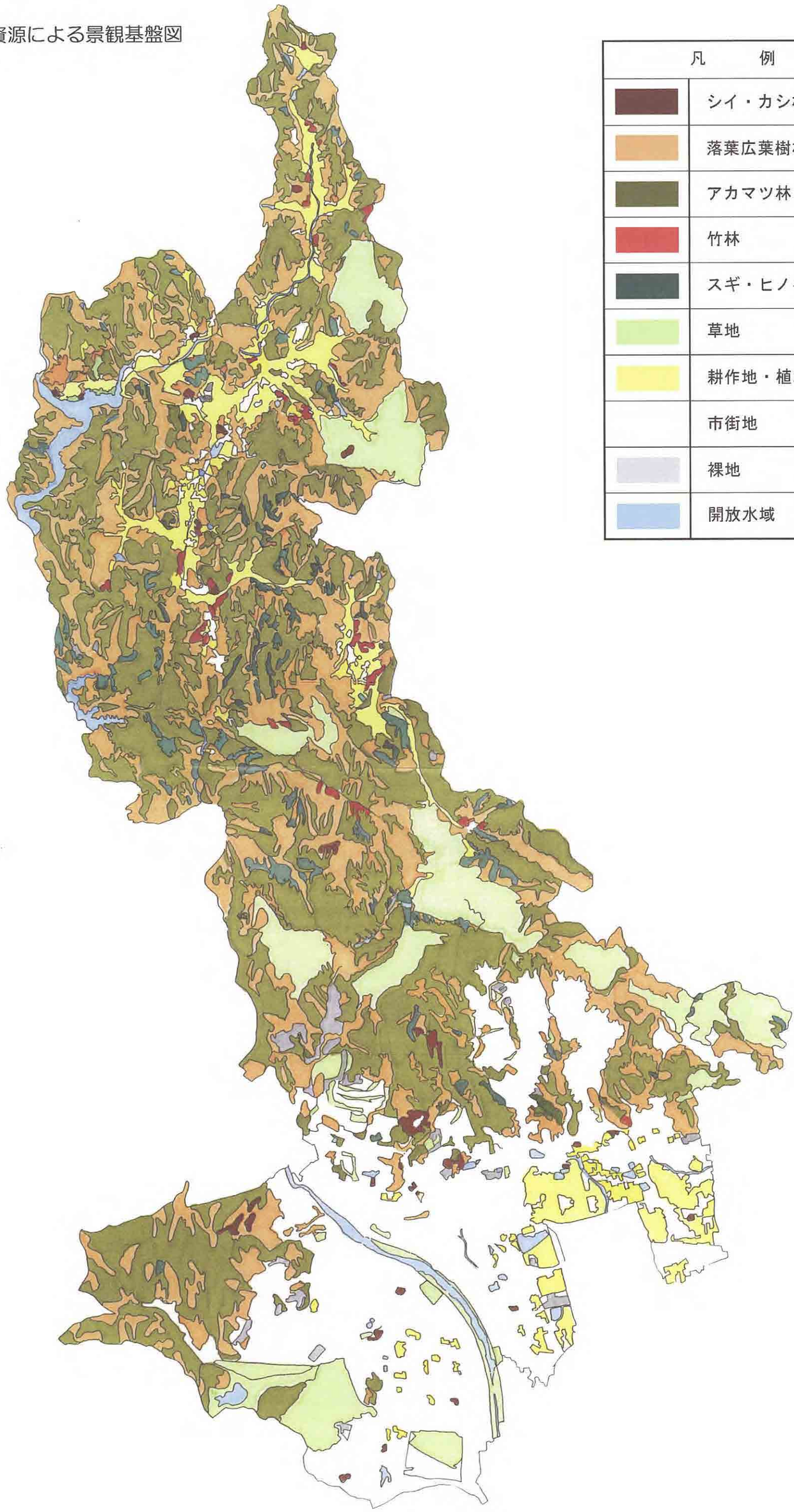



図２－６
宝塚市の植生資源による景観基盤図